



TITLE:

廣南王阮氏と華僑：特に阮氏の對華
僑方針について

AUTHOR(S):

藤原, 利一郎

CITATION:

藤原, 利一郎. 廣南王阮氏と華僑：特に阮氏の對華僑方針について. 東洋
史研究 1949, 10(5): 378-393

ISSUE DATE:

1949-05-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/138899>

RIGHT:

廣南王阮氏と華僑

藤原利一郎

—特に阮氏の對華僑方針について—

ここに廣南王阮氏といふのは十六—八世紀にかけて今の佛印アンナム (Annam) の承天 (Thuathien) 廣南 (Quang-nam) 地方を中心とする當時の黎朝大越國の南半に據り半獨立國、いはゆる廣南國^①——また交趾支那國ともいふ^②——を建設した阮氏であつて、十九世紀の初、嘉隆 (Gia-long) 帝即位以後全越南に君臨した阮朝の前身に當る。阮氏はその祖の阮潢が一五五八年に始めて順化に鎮し、次いで一五七〇年、廣南をも兼領するに至つて以後次第に強力となり、殊に十七世紀の初、大越の實權者鄭氏との關係が極度に惡化して遂にこれと戦を開くに至つて以後は名目上はなほ黎朝の正朔を奉ずるものの事實上はこれと分離獨立するに至つたもので、以後一七七四年西山 (Tay-son) の亂中、宿敵鄭氏の軍

の攻撃によつて居城順化が陥り南方に逃亡するに至る迄廣南國の支配者であつた。廣南國の版圖は當初の中南部アンナムの比較的小地域から特に南方に發展し、十七世紀末には今の交趾支那地方に進出しやがて西はシヤム灣に達するに至つたが、この交趾支那地方が今日佛印諸地方中最も華僑の多いことは周知の通りであり、又その經濟的地位についても贅言を要しないが、その基礎が早く廣南王阮氏の時代に築かれたことは注意しなければならない。阮氏治下の華僑の活動については鄭懷德の嘉定城通志^③の佛譯である Aubaret の Histoire et Description de la Basse Cochine-chine et Maybon の Histoire moderne du Pays d'Annam. 等に於てもやうかがふことが出来るが、以下本稿に於て

述べようとするのは廣南王阮氏と華僑との關係、特に阮氏の對華僑方針に就てであつて、これが阮氏と華僑との關係史上如何に現はれてゐるかを見ると共に、またこれを同時代大越を支配した鄭氏のそれと比較してその相違の由來を明らかにしようとするものである。

二

大南寔錄前編（以下「寔錄」と稱す）は阮朝時代になつて嘉隆即位前の祖先時代の記録を蒐集編纂せしめたものであつて、いはば廣南王阮氏歴代の實錄であるがその中に於て阮氏と華僑との關係史上注目すべき最初のものは同書卷五太宗（＝阮福瀨）己未三十一年（1679）の條に見える明の龍門總兵楊彥迪・高・雷・廉總兵陳上川等一黨の歸附の事件である。併し吾々はこれに先立つて十七世紀の前半既に廣南の東方數里フェフォ河（Song Fai Fo）に沿ふ港市フェフォ（Faifo・會鋪）に於て阮氏の許可の下に在留華僑によつて、彼等の街が建設されてゐたことは注意しておかねばならぬ。當時のフェフォは外國商船の出入が多く貿易が盛んに行はれ都會といふよりはむしろ大きな市場といふ方が

適當であつたらしい④。同地在住の外人中では華僑の外日本人が多く、この兩者は夫々限られた地域に於て彼等の街を建設し、その法律と慣習によつて生活するを許されてゐた⑤。このことは阮氏と華僑との關係史上また阮氏の對華僑方針を考へる上に於ても重要な事實である。

併し乍ら阮氏と華僑との關係が本格的に發展を示すのは矢張り上述寔錄に見える事件であらう。而してこれは今日交趾支那地方における華僑發展の淵源をなすといはれ、特に重要性を有するといふべきである。この事件については以上の寔錄の外、嘉定城通志（卷三・疆域志）や黎貴惇の撫邊雜錄（卷一）の中にも見えるが、今寔錄によれば、

己未三十一年（1679）春正月、故の明將龍門總兵楊彥迪・副將黃進・高・雷・廉總兵陳上川・副將陳安平、兵三千餘人・戰船五十餘艘を率ゐ、思容沱瀾（Tourane）海口に投じ、自ら陳ぶらく、明國の連臣、義として清に事へず、故に來る、願はくは臣僕たらんと。時に議すらく、彼は異俗殊音にして猝か

に任使し難し、しかれども窮逼して來歸すれば拒絶するに忍びず。眞臘國の東浦（嘉定・Gia-dinh）地方、沃野千里、朝廷未だ經理するに暇あらず。彼の力に因りて地を開き以て居らしむるに如かず。一舉にて三得なりと。上之に従ふ。乃ち命じて宴勞嘉獎せしむ。仍ほ各々に授くるに官職を以てし、東浦に往きて之に居らしむ。又眞臘に告諭し以て外無きの意を示す。彦迪等國に詣つて謝恩して行く。彦迪・黃進の兵船は駛せて雷叟（Loirap）海口に往き、美湫（Mi-tho）に駐札し、上川・安平の兵船は駛せて芹徐（Can-xu）海口に往き盤轄（邊和 Bien-hoa）に駐札し、間地を開き舖舍を構ふ。清人及び西洋・日本・蘭婆の諸國の商船湊集す。是によりて漢風漸く東浦に漬く。とある。所で右に見える龍門總兵楊彦迪の渡南以前の履歷については中國側史料に於ても殆んど見えぬが、ただ清朝聖祖實錄、康熙十六年（1677）十二月辛亥條、廣東・廣西總督金光祖の疏報の中に「海逆楊彦迪夥黨を糾集し、突かに欽州を犯す。遊擊劉士貴、兵を率ゐて賊衆を追殺す。又遊擊高應臣、參將薛保と會同

し撃つて逆黨を敗り、斬殺すること甚だ多し」とあり、當時の彦迪は恐らく欽州龍門灣方面を本據とする海賊として清軍に抵抗を續けてゐたものでないかと思ふ。併し彼等の抵抗も空しく附近高雷廉地方の海賊陳上川等と共に麾下の兵衆、戰艦を率ゐて南洋方面に新天地を求めて出發、ツーラン海口に投錨し廣南王阮氏に對し、殊更に明將を稱して仕官を求めたものと考へられる。

當時邊和・美湫を含む東浦地方はもとより未だ眞臘國の版圖であつた。今メイボンの安南國近代史によつて略述するに「Dong-nai（同狔＝邊和）、Moi-xu（＝蘭婆地）地方には十七世紀夙に安南人の植民地が出来て居り、一六五八年には眞臘王 Ang Chan（蟬禎）が安南との國境を侵したといふ口實により、鎮邊營の軍が Moi-xu 地方を占領し Ang Chan を一時捕虜とする等のこともあつた。この後 Ang Chan の兄弟 Sor と Tan とが起つて安南人を撃退したが、一六七二年に勃發せる眞臘の内亂は再び安南側に干涉を許すこととなつた。即ち亂に際して Tan は安南側に避難所を求め

たが、内亂で殺された Sor の長子 Chi が王位に即くや安南軍は Saigon, Kampot, Pnom-penh 等の諸城を占領し Tan の嚮導は Chi の都 Ou-dong に攻め入った。Chi は財寶を持ち軍を率ゐて逃れかくて眞臘は二分したが二年の後 Tan は死し、その養子 (Tan の甥) Non が Hiên-Vuong (阮福瀨) の承認の下に二王となり Saigon に治し、又 Ou-dong には Sor 王の他の息 (Chi の兄弟 Prea Ang Sor) が第一王 (正王) となり共に順化の領主 (阮氏) に朝貢した。併し一六七九年に至り Non の従兄弟 Ang Sor はシャムの援助により Non に勝利を得、Non はまた安南側に逃れることになった。^⑧とある。

阮氏は楊彦迪等の言語風俗の相違の外、その來意にも疑ひを懷いたものの如く、^⑨たまたま右の眞臘國內のありさまに乘じ、彼等をその嘉定地方に屯居せしめ、鉾先を眞臘に向はしめると共に、同方面の沃野の開拓を行はしめ、廣南國の南方發展に利用しようと考へたものと思はれる。美湫・邊和等に定着後の彼等が未開地の開發に努めたことは上引憲錄の文によつても察せられ、その開發と生産の向上は新たに華僑商人等の渡來

を促し相携へて同地方における彼等の確固たる地盤を築くに至つたことが想像される。

美湫駐屯の副將黃進はやがて主將楊彦迪を殺し、自ら龍門の衆を統べ、屯所を雞溪 (建和) に移し、城堡を構築し、大砲を鑄造し、戰船を建造し兵を以て眞臘國の侵略を行ふに至つた。眞臘正國王匿秋 (Neac-thu Ang Sor) は之を怨み、安南への貢を絶ち、備へを固めたが、柴棍の二王匿嫩 (Non) が之等の次第を鎮邊營に報ずるに及び遂に廣南の對眞臘征伐が行はれるに至つたのである。^⑩この役に於て廣南側では先づ謀を用ひて叛意の測り難い黃進を斃し、その率ゐる龍門の餘衆を招撫し彼等をもとの高・雷・廉の將陳上川に統べしめ、先鋒として對眞臘戰に従軍せしめたが、かかる事實は明かに阮氏の軍事上における華僑の利用であると言ひ得る。眞臘二王嫩はその後間もなく死んだが阮氏はこれを機會にもはや柴棍王を任命せず嘉定府等を設置して積極的に眞臘疆域の安南領土化をはかることとなつた。即ち、憲錄卷七顯宗 (阮福淵) 戊申七年 (1698) 二月條に、

初めて嘉定府を置く。統率阮有鏡に命じ、眞臘を経略せしめ、東浦の地を分ちて鹿野の處を以て福隆縣と爲し、鎮邊營（今の邊和）を建て、柴棍の處は新平縣と爲し藩鎮營（今の嘉定）を建つ。營には各々留守・該簿・記錄及び船水歩奇隊の精兵屬兵を設け、地を斥くこと千里、戸を得ること四萬を逾ゆ。乃ち布政（廣平 Quang-binh）以南の流民を招募して以て之を實し、社・村・坊・邑を設け、界分を區別し、田土を開墾し、租・庸稅例を定め、丁田簿籍を撰修す。

とあり、サイゴン地方の安南領土化はここに始まるが、同地方の開発と共に來住の華僑商人に對しては同じく憲錄につづいて、

清人の來商して鎮邊に居る者を以て立てて清河社と爲し、藩鎮に居る者は立てて明香社と爲す。^⑭是に於て清商の居人悉く編戸となる。

とあつて、彼等もまた安南籍に編入されたものの、地域毎に安南人とは別個の社を建てしめてゐることは、注意すべきである。兎も角、嘉定地方は十七世紀楊彦

通等華僑の集團的來住以前、既に安南人が入植し、安南の勢力が頃に加はりつつあつたが、その開發と安南領土化の過程には華僑の力が與つて力あつたことは上述によつて知られる通りであり、而も之は阮氏の華僑利用方針による所が大であるといはねばならぬ。阮氏が龍門等の華僑將兵を用ひることは以後も引續いて見られ、たとへばその後眞臘匿秋の反するや、龍門の將兵が陳上川の統率の下に征に参加し、敵と連戦して皆之に勝つたとある如き^⑮或ひは阮福澍時代、ラオス人訖卒が眞臘の兵を以て嘉定に寇するや、陳上川の子、大定がまた龍門の屬將を率ゐて之を破つた等の如き^⑯皆これである。兎も角陳上川・大定の父子は特に對眞臘の戰に於て阮氏に最も貢獻したのであつて、これは次の河僊（Ha-tien）の華僑鄭氏と共に阮氏と華僑との關係史上逸すべからざる存在である。

三

阮氏との關係上、嘉定の華僑に次いで重要なのは河僊の華僑鄭氏である。鄭氏の祖鄭玖は大南列傳前編（以後「列傳」と稱す。卷六鄭玖傳）によれば、廣東省雷州

の出身で、明の亡ぶと共に髪を留めて本國を逃れ眞臘國に投じてその屋牙^①となり、同國の柴末府、即ち河僊地方に諸國の商人が湊集するのを見て芳城^②に居を移し、そこに賭博場を設けて税を征し、又坑銀によつて驟かに富を致した。よつて流民を附近の諸地方より集めて七社村を建て開拓に當らせたとあり、その後シヤム軍の侵入を被り一時同國に送られたが、この苦き経験はもはや眞臘の頼むに足らないことを知らしめたと見るべく、使節を廣南王阮氏のもとに派して上表して河僊の長たらんことを求めた。蓋し鄭玖としては阮氏の勢力が日に加はるのを見て新たな保護者として阮氏を求めたといふべきである。所で鄭玖の阮氏への歸附の年次については寔録等の一七〇八年説、嘉定城通志等の一七一四年説その他一七二四年説もあり、明かでない。併しシヤム側の事情から考れば少くも一七一七年より後としなければならぬであらう。^③ 阮氏は當時未だ河僊方面に迄その勢力が及んでゐなかつたので、彼の歸附を歓迎したと見るべく、同地を河僊鎮となしその版圖に編入し、鄭玖を河僊總兵として、その自治を

許した。併し鄭氏が阮氏とより深い關係を有つに至つたのは次の鄭天賜時代である。

鄭玖は一七三五年死去し、翌年子の天賜が河僊鎮都督となつたが、阮氏は彼に龍牌船三艘を與へ、船貨に對する税例を特免し、毎年出洋して貴物を採買し上進せしめ、又特に鑄錢局を開いて貿易を通ぜしめたとあり、河僊の貿易港の性格より、右の如き諸特權を彼に賦與して阮氏の爲に利をはからしめたと考へられる。天賜がのち人を遣して龍牌船に乗り、水火金剛鑽・鶴頂・西洋火雞・五色鸚鵡・華席・洋布等の諸品物を賣らして上進せしめ、嘉賞を被つたといふ如き。^④ 右の貴物上進の著しい例であるが、天賜が河僊地方の事實上の領主として管下の治安を維持し、特に阮氏の爲にその疆土擴大に貢獻したことについては特筆すべきである。即ち天賜が阮氏の許可の下に衛屬を置き、軍伍を訓練し、城堡を起し、街市を廣めたことは諸書に見える所であるが、彼は一七三九年春の眞臘、匱盆の河僊攻撃に際し、よく之を擊退して勝利を博したのを始め、特に一七五六年、廣南軍の討伐を被り河僊に逃れ來つた眞

臘王匿原 (匿蟪源 Ang Songnon) をして尋奔 (Tam-don) 雷嶺 (Loirap) 二府の地を阮氏に割讓せしめたにつぎ、翌年また眞臘匿尊 (Ang Tong 匿原の族叔匿潤の子) が内訌により河僊に逃亡するや、彼の爲に阮氏の封王を斡旋し、その天賜へ割讓した芹渤 (Kampot) 等五府の地を阮氏に献じてその版圖の擴大に盡したのである。²⁴ なほその他管下に蜂起の陸海諸賊の勦蕩鎮壓等にも度々功を樹て、たとへば海匪德なるものの誅滅 (1747) 潮州人陳太等叛徒の勦蕩 (1769) 更に河僊の逃兵等の襲撃撃退 (1770) 等功績顯著なものがある。河僊はこの後一七七一年に至り、シヤム軍の攻撃により衆寡敵せず城陥り、天賜は鎮江に逃れたが、一方阮氏も西山の亂の勃發により俄かに危殆に瀕したのである。而もこの時に當つて鄭氏がなほ人を遣して軍餉を阮氏に供せんとしたことは華僑鄭氏と阮氏との深い關係を示すもので注意すべきである。

四

以上は阮氏と主要な華僑との關係について述べたが、阮氏が夙に華僑利用の意圖を有し、疆土の開發、

對外貿易、はたまた眞臘に對する軍事方面にまで、彼等を利用したことは右によつて略々知り得られる所である。なほこの外、阮福潤時代、國書・貢品を齎らして廣東に赴き清朝に封を求めしめた黃辰・興徹は在留華僑と認められ、²⁵ また同じく阮福潤の二十五年、在留福建省人平貴等をして中國廣西省に往き、諒山關より入つて北河の虛實を探らしめたといふ如き、²⁶ また阮氏が華僑の特性に乗じてこれを利用せんとしたことを示す事例である。併し阮氏のかかる華僑利用の半面、既述によつて見る如く、彼等に相當の自由を與へ必要に應じて諸種の特典をも賦與してゐることも併せ考へねばならぬ。尙ほ寔錄によれば阮氏は鎮邊營を襲つた福建華商李文光等五十七人に對して、その捕縛後彼等が華人たるの故を以て加誅を宥恕したといはれる如き、²⁷ 華僑に對する寛大さを示すものといはねばならぬ。然らば當時北方大越を實質上支配した鄭氏の對華僑方針は如何であつたであらうか。

鄭氏の對華僑方針の最初にうかがはれるものは大越史記全書の黎朝玄宗景治元年 (1663) 八月條に、

各處の承司をして屬内の民を察し、外國客人の寓居する者あらば、各々類して以て聞し、宜しきに随つて區別し、以て殊俗を別たしむ。

とあるものである。所でこの「外國客人」は潘清簡等の編纂にかかる欽定越史通鑑綱目（以下「綱目」と稱す）卷三三によれば「清國客人」とし、右を華僑のみに對する令と解してゐるが如何であらうか。併し乍ら當時は明清鼎革の直後であり、南支の動亂未だ收まらぬ狀勢なれば、難を避けて大越境内に流入の華人も多かるべく、鄭氏は之に對してかかる手段をとつたものと見るべきで、少くも華僑が右の主要な對象であつたことは疑を容れない。

さて右によつて華僑に對する居住制限が施行せられ安南人との雜處が禁止せられたが、次に現はれるのが綱目（正編卷三四）熙宗正和十七年（1696）七月條に見える改俗令である。即ち、

嚴に北人の來寓者を飭めて一に國俗に遵はしむ。清入りて中國に帝たりてより薙髮短衣、一に滿洲の故習を守り、宋明の衣冠禮俗、之が爲に蕩然たり。北

商の往來日久しく、國人亦倣ふ者あり。乃ち嚴に諸北人の我國に籍する者を飭めて言語衣服一に國俗に遵はしむ。

とあり、文中北人・北商はいふまでもなく華人華商を指す。周知の如く安南は古くより漢文化を攝取し、之を尊敬する氣持が強かつたから、鄭氏が滿清の風俗に對し嫌惡の氣持をもつたことは疑ひないが、兎も角華僑に對する右の如き改俗令の發布は彼等に對する一種の自由束縛を意味することは勿論である。なほ右と同時に華僑の都城への出入の自由を禁止したことも注意すべく、之また華僑に對する束縛であることは言を俟たない。

華僑に對する制限はやがて鑛山方面にも及んだ。北部東京山地帯の鑛山は鄭氏時代に入り次第に開發が加へられたが、その採鑛には土人の外、特に華僑が多く雇傭された。これはあく迄郷里に執着し遠く蠻地に赴くのを好まない安南人の消極的性格と、これ對する華僑の蓄財の強い意慾に裏づけられたその積極性の然らしめたものと考へられるが、その集居と争鬭の頻發

は却つて治安を害するおそれがあり、やがて各鑛場の人員を制限することになつたのである。即ち「綱目」裕宗、永盛十三年（1717）十二月條に、

諸鎮の鑛場制限を定む。各鎮の金・銀・銅・錫の諸鑛多く清人を募りて掘採す。群集日に衆く、他變を生せんことを恐れ、乃ち例を定む。毎鑛多き者は三百人、次なる者二百、少なる者一百、數を過ぐるを得るなかれ。是に於て鑛場に始めて制限あり。

とあり、鑛場人員の制限といふものの事實上華僑雇傭人員の制限である。

併し乍ら之等の諸制限も餘り徹底しなかつたか、後に至つて弛緩したか、兎も角、景興時代に入り華僑に對する之等の制限抑壓が再び加へられてゐるのである。先づ綱目（正編卷四二）景興二十五年（1764）七月條によれば、

申ねて北商に禁じ雜處するを得ざらしむ。是より先、北商の投來販賣はただ安廣の雲屯・萬寧及び乂安の芹海・會統・潮口に於てせしめ、居住するや、民と雜處するを得ざらしむ。ときに萬寧の民、流亡する多

く、或ひは虚に乗じて寓する有り。及び永代・潮口に於て舖店を開張する多し。是に於て鎮官をして所在に飭めて押送出境せしめ、舊に仍り之を區別せしむ。

とあつて、再び華僑の雜處禁止を令したが、つづいて同三十二・三兩年にも夫々清人・山南諸地方に令を下して華僑の雜處嚴禁を命じてゐるのを見る。⁽²⁴⁾ なほ鑛場についても、制限は守られなかつたか、依然として弊害は著しかつた如く、遂に景興二十八年（1767）

に至り、阮廷訓・吳仕等を遣して兵を率ゐ、太原の送星廠に赴き華僑を適宜撫勸するを命ずるに至つた。⁽²⁵⁾ たまたま鄭楹の死によつてこのことは中止となつたが上述華僑の雜居再禁と相俟つて當時における鄭氏の華僑斷壓方針をうかがふことが出来る。

以上鄭氏の華僑に對する制限、抑壓について述べたが、この他鄭氏が特に華僑に對する増税を行つたといふ如きも華僑壓迫の事例に擧ぐべきものであらう。⁽²⁶⁾ 要するに鄭氏は終始華僑抑壓の方針を持したことが明かで、阮氏の如く之を利用せんとした如き記録は全く見當らないのである。

五

然らば右の如き阮・鄭兩氏の對華僑方針の相違は何に因るものであらうか。廣南國はそのはじめ、阮潢が順化・廣南地方を領した頃は國土は狹小、人口また稀少であり、チャンバ餘孽の騷亂ある上、莫氏徒黨の反抗が見られ、殆んど獨立國たるべき見込はなかつたのである。さればこそ競争者鄭檢も阮潢の順廣行に同意を與へたのであつて、莫氏一派の順廣侵寇は概ね洪福元年（1572）のそれを最後に見られなくなつたがチャンバの叛亂はこの後に於ても繰り返され、而も國家の基礎漸く固まると共に、北方鄭氏との關係が悪化して遂に今の廣平省方面を舞臺に兩軍の戰鬪が開始された（1627）ことは既に知らるる所である。廣南國の國土廣大、人口の稍々増加を致したのは後年今の交趾支那を版圖に收めて以後のことであつて、撫邊雜錄（卷五）に見える吳世璘の「論錢二十一割」の中に、先君宇を啓きてより、地尙狹く、民尙稀なり。南に未だ嘉定の地有らず。北尙橫山の警有り。……今天下承平日久しく、地廣く、民蕃く、穀を生ずるの土は已

に盡く墾し、山澤の利は已に盡く出づ。加ふるに嘉定龍湖の田あり。又天災旱潦の變異なし。

とあるのは如上の事情を傳へてゐると稱することが出来る。尤も廣南地方は古くより順化地方に比べては人口稅收共に豊富であつたものの如く、寔錄（卷一）太宗壬寅十五年（1602）條にも、

廣南は土沃にして民稠く、物業饒裕稅課の入る所順化に視ぶれば最も多しと爲す。兵數亦大半に居る。等とあるが、それがトンキンデルタ地帯を含む鄭氏領下のそれに比すれば遠く及ばなかつたのは勿論である。されば鄭氏との對抗上からも疆土の開拓と對外貿易の發展が阮氏にとり國初より最も緊要な問題であつた。而も上述楊・陳等華僑兵衆の歸附は阮氏の望む南疆開拓に必要な軍事的經濟的人員を提供したものと云へ、河僊の鄭氏また阮氏の版圖の擴大と對外貿易の發展に貢獻するものであつた。

なほ對外貿易については早く寔錄（卷一）太祖十五年（1572）の條に、

是時上（阮潢）鎮に在ること十餘年……諸國の商

船湊集して遂に一大都會を爲す。

とあり、これは阮氏が廣南を領するに至つて程なき頃であるが、當時既に廣南のフェフォには諸國の商船が湊集し盛況を呈してゐたことを察せしむるものがある。フェフォは Pulo Clam と Tourane の兩海口より出入することが出来、中部アンナムに於ける物資の大集散地であり大貿易場であつた。撫邊雜錄(卷四)に會安庸(Feifo)について、

廣南の若きは百貨有らざる所なし。諸蕃邦は及ばず。凡そ升菴・尊盤・歸仁・廣義・平康等の府及び芽莊營の出だす所の貨物は水陸より船馬にて皆會安庸に集まる。

とあるが、かかるフェフォの物資の大集散地の形態は早くから現はれてゐたであらう。阮氏は領内諸港に於ける出入外船に對してその船籍により夫々一定額を課税徴收したのであつて、寔錄には國初の商船税例として次の如きものを載せてゐる。^③

| | | |
|-----|--------|--------|
| 上海船 | 到税錢三千緡 | 回税錢三百緡 |
| 廣東船 | 〃 錢三千緡 | 〃 錢三百緡 |

| | | | | |
|---------|---|------|---|------|
| 福建船 | 〃 | 錢二千緡 | 〃 | 錢二百緡 |
| (東は南の誤) | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 海東船 | 〃 | 錢五百緡 | 〃 | 錢五十緡 |
| 西洋船 | 〃 | 錢八千緡 | 〃 | 錢八百緡 |
| 碼瑤 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 日本船 | 〃 | 錢四千緡 | 〃 | 錢四百緡 |
| 暹羅船 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 呂宋船 | 〃 | 錢二千緡 | 〃 | 錢二百緡 |

右によれば回税即ち出港税は到税即ち入港税の十分の一となつてゐるが、なほ入港商船に對しては積載貨物を検査して紅銅等の特殊品については獨占的に買上げを行はしめたのであつて、この検査に際して貨物を隠匿する者は處罰し船貨を沒收しまた空船で貨物のないものは入港を許さない等の規定もあつた。^④即ち阮氏が國初より領内所在の貿易港を利用し商船に對する課税により收益をあげんとしたことは明かな事實であるが、かかる必要より在留外商の活動に對しても出来るだけ自由を許し、外船の誘致に努めたとみるべく、早くよりフェフォの一定地域に治外法權を許した如きもこれを物語るものと言ひ得る。而も在留外商中最も活躍したのは華僑といふべく、^⑤従つて彼等に對して或程度の自由を認め、寛大を旨としたことは尤もといはね

ばならぬ。なほ既述鄭天賜に對して龍牌船を與へ船貨税例を免除し、鑄錢を許した如きも對外貿易上に於ける彼の地位能力に期待した爲に外ならない。

以上は阮氏の場合であるが鄭氏の大越についていへば、同國は土地肥沃、人口稠密な所謂トンキンデルタ地帶を含み、阮氏との對抗上敢へて華僑の如き外人の助力を要せぬのである。ただトンキン方面は鑛山多く、鄭氏時代に入つて之等の開發が頻りに行はれ、華僑が多くこれに雇傭されたが、彼等の集居争鬭による治安上の害は大でやがて制限抑壓に轉じたことは既述の通りである。

かくの如く大越に於ては廣南に於ける如く華僑の助力を要せぬが、その中國との接壤といふ地理的關係は尤も華僑に對し警戒を起させるものである。蓋し安南は獨立後に於ても宋・元・明と歷朝中國の侵入を被り、安南側としては中國は頗る警戒を要する隣國であつた。従つて國內居住の華僑の活動に制限束縛を加ふべきは勿論で、前述の居住地制限等も主原因はこれであり、「綱目」に稱する「風俗の混雜」などはむしろ

二次的なものといふべきである。^④ 況んや南方阮氏との對抗の狀勢下、彼等の行動に嚴戒を加ふべきは當然である。その他上述華僑の鑛場地に於ける集居争鬭・制限無視の行動、或ひは安南人との密貿易等もまた華僑抑壓を強めしめるものであつた。

要するに阮氏は鄭氏との對抗上その國土開發・對外貿易發展に努めたが、その必要上華僑を利用しその助力を得んとし、従つて彼等に相當の自由を認め、寛大な方針を持し必要に應じて特典をも與へたが、大越鄭氏は華僑の助力を要せぬのみならず中國に對する警戒、華僑自身の行動よりその自由を束縛・制限し、抑壓を加へる方針をとつたといひ得る。

六

以上廣南王阮氏の華僑との關係、就中その對華僑方針に就いて述べたが、最後に右の如き阮氏の方針が同地方華僑の發展に如何なる影響を及ぼせるかといふに、たとへば西山の亂中、阮文岳の命により嘉定在住華僑の萬餘人が兵民商賈を論せず殺害されたといはれるによつても同地方華僑發展の有様が察せられるが、^⑤

た寔録に西山の亂中清商の悉といふ者家貲億萬を以て敗殘の廣南阮氏の軍を助け、爲に軍勢が大いに振つたとあることは巨萬の富を有する華僑大商人の存在をうかがはしむるものである。⁽⁴⁾なほ阮福潮時代華僑の姓、黄なる者、折柄の銅錢欠乏に際し、西洋白鉛を買つて鑄錢せんことを獻言し阮氏の採用する所となつた如き、⁽⁵⁾當時華僑が廣南國の經濟問題に發言權を有する地位にあつたことを思はしめる。この他、鄭氏が河僊に於て政兵兩權を握り、また貿易鑄錢の特典を賦與され、非常な勢力を有してゐたことは既述の通りである。

要するに廣南國に於ては相當顯著な華僑の發展が見られるが、北方鄭氏領下の大越に於ては鑛場等に於ける華僑の發展以外、右に匹敵すべき華僑の大なる發展は見られぬ様である。尤も東京の興安(Hung-yen)の如きも當時の華僑の許された居住地として榮えたことは有名であるが、⁽⁶⁾總じて廣南の如き華僑の發展はなく又その勢力は弱かつたと考へられ、兩氏の對華僑方針の相違の影響を思はしめるものがある。併し乍ら廣南國に於ける華僑の發展については阮氏の方針以外に、

同國が南海航路の要衝に位し、華僑の渡來並びに貿易活動に便利であり、且つ交通便利、土地廣大、地味豐沃の交趾支那の平野を有し、彼等の最も得意とする商業活動を自由に發揮するを得しめたことが大きな因子としてつけ加へらるべきであらう。

註

① 廣南國の稱は來航の貿易商人より始まつたと思はれる。大南寔録前編卷七、顯宗壬午十一年五月條註にも清船嘗來商于廣南。故稱我爲廣南國。

とある。

② 今の交趾支那は佛印南端地方を指すが、十七・八世紀時代の歐人は今のアンナム地方に對してこの稱をなした。「交趾支那」の語の意味する地方の變遷については、Arousseau, L. Sur le Nom de Cochinchine. (B. E. F. E. O. Tome XXIV.) に詳し。

③ 鄭懷德は嘉定省平陽縣明郷社出身、嘉隆七年(1808)より十一年迄と、同十五年より明命元年(1820)迄の間、嘉定協總鎮(副總鎮)であつた。(大南正編列傳初集卷十一參照)嘉定城通志はその明命年間の作である。(但し、懷德は明命六年卒。)

④ Maybon, Ch. B. Histoire moderne du Pays d'Annam n. p. 51.

⑤ *ibid.*

⑥ 嘉定城通志に記す所は略々同じ。但し、寔録が太宗己未三十一年正月に繫けてあるに對し、通志では同己未三十二年（通志ではすべて即位年より起算し寔録の即位翌年よりすると異なる。）五月に繫く。この點撫邊雜錄も同様で（黎）熙宗永治四年己未五月とす。撫邊雜錄の記事は次の如くである。

大明進臣龍門將軍楊彥迪。率戰船五十餘艘兵三千餘人。泊思容沱瀾海門外。畏順化兵饒不敢入。思容守將令出問之。彥迪樹白旗乞降。勇國公即令往高居綿國界。令高綿王分地。許彥迪居駐美秋海門。結爲兄弟。歲修貢獻。

なほ撫邊雜錄の著者黎貴惇は十八世紀大越における有名な政治家で、又學者であり、右書は西山の亂に際し、鄭軍が南下し順化を攻陥した際、軍に従つて同方面の任務に従つた黎貴惇がその滞在中實際に得た同地方の記録や見聞に基づき記したもので廣南阮氏時代の研究に重要な資料である。六卷より成り、景興三十七年（1776）八月の序文を有す。なほ黎貴惇の著作については、

Cadière, L. et Pelliot, P. *Première Etude sur les Sources annamites de l'Histoire annam.* (B. E. F. E. O. Tome-IV.) p.p. 635-6 を參照。

⑦ 東華錄康熙卷二〇、康熙十六年十二月辛亥條にも略々同様見ゆ。

⑧ Maybon, *ibid.* p.p. 116-8.

⑨ 嘉定城通志はこの點につき、次の如く記してある。

時以北河屢煽。而彼兵遠來。情偽未明。況又異服殊音。猝難任使。……

⑩ 寔録卷六英宗戊辰元年（1688）六月條。

⑪ 同上。及び同己巳二年（1689）閏正月條。

⑫ 嘉定城通志に於ては英宗庚午四年（1690）の條に掲ぐる Moura はカンボヂヤ史料により一六九一年とす。Maybon, *ibid.* p. 120. 參照。

⑬ Maybon, *ibid.* p. 121.

⑭ 明香社は後に至つて明郷社と書かれるが明香・明郷は共に安南番で Minh-huong と同音である。安南各地の明郷社は、何れももとはかくの如く安南籍に編入された華人の社であり、明郷・明郷人も本來は安南籍編入の華人をいへるものであつたと思はれる。

⑮ 寔録卷七、顯宗己卯八年（1699）秋七月、及び同九年三月條。

⑯ 寔録卷九肅宗辛亥六年（1731）四月條。

⑰ 泉井久之助博士の御教示によれば Bernard の Dictionnaire Compoisien-français に屋牙即ち okha の語と同一 grand mandarin, officier royal とある由。なほ Aubaret は單に mandarin と譯ち Aubaret, Histoire et Description de la Basse Cochinchine. p. 281

⑱ 柴末府は河僊鎮の北方柴末山から出た名稱で、柴末は

カンボヂヤ名では Banteay Meas と云ふ。Maybon, ibid. p. 132. なほ柴末山については嘉定城通志卷二山川志に見ゆ。

(19) 嘉定城通志卷三疆域志、河僊鎮の條に、

河僊乃眞臘故地。……華言芳城也。

とあり、河僊の安南稱である。華言は同條につづいて、

柴末府。華民・唐人・高綿・閩閩諸國湊集。

等ともあり安南語を指すこと明かである。

(20) 寔錄卷八は顯宗戊子十七年にこれを繫け、

列傳鄭玖傳もこれに同じ。右は一七〇八年である。之に對し、嘉定城通志は顯宗甲午二十四年(寔錄の起算法によれば二十三年)のこととし、河僊鎮叶鎮鄭氏家譜も同様である。これは一七一四年である。併し Reynier よつた史料によればこれは一七二四年頃としてゐる。何れにしても明かでない。(Maybon ibid. p. 136)

所で鄭玖の歸附はシャムの河僊攻撃により彼がシャムに送られて後その内亂により脱出し再び芳城に居つて後のことである。シャムの河僊攻撃はウッドによれば一七一七年のことであり (Wood, A History of Siam, p. 227) その内亂は時の王 Tri Bra の後繼者に關するものであらう。(ibid. p. 229) とに角鄭玖の歸附は一七一七年より若干年後であるべきこと疑ない。

(21) 列傳卷六鄭天賜傳その他。

(22) 同上。世宗(阮福潤)丁卯九年乙卯(1747)の

ことである。

(23) 寔錄(卷十)世宗己未元年(1739)正月條。

(24) 同丙子十八年(1756)條。

なほこの一七五六年といふ年次は諸書必ずしも一致せず (Maybon, ibid., p. 127.) 今寔錄による。

(25) 同丁丑十九年(1757)條。

(26) 何れも寔錄、列傳等による。

(27) 寔錄甲午九年(1774)四月條。

(28) 同卷七、壬午十一年(1702)五月條。

(29) 嘉定城通志卷三。世宗孝武帝戊午元年(1738)夏四月。

夏四月。

定官制。改色服。移風易俗。與民更始。革除北河。

註に時以布政州瀾江以南爲南河。以北爲北河。

と見え、北河は廣平省瀾江 (Tinh-Giang) 以北なることが分る。

(30) 寔錄卷八。丙申二十五年(1716)八月條。

(31) 寔錄卷十。丁卯九年(1747)正月條。

(32) 綱目。(正編卷三四) 黎熙宗正和十七年(1696)七月條。

諸北商來寓。無有知識人經引。不得擅入都城。

(33) 續場に於ける華僑が彼等の間に於て互に争鬭を繰り返したことは、綱目卷四三景興二十八年正月條に、太原の續場につき、

……於是一廠僮夫至以萬計。破丁磔尸。結聚成群。其

中多潮州詔州人。獷悍好鬪。每年礦口。輒興兵相攻。死者即投諸壑。

と見えるが、之は南支方面に多い械闘であらう。礦場の華僑は之等地方の者であり、従つてその習俗により争闘を行つてゐたのである。

②黎皇朝紀、辛卯三十二年清朝乾隆三十六年（1771）五月。

旨下清（化）父（安）二處、嚴禁北商。不得雜處民間。同三十三年（1772）四月。命山南鎮守。凡諸北商雜居轄內者。勒回朝庸。

この黎皇朝紀（佛國遠東學院にあり。寫本）は黎顯宗景興年間を記し記事極めて詳密である。なほ同書によれば、本文綱目景興二十五年（1774）の華僑雜處禁止に先立ち、戊寅十九年（1758）條に「議區處北商事宜」とあるが、却つて綱目の記事が全く見えぬのは不思議である。

③綱目（卷四三）景興二十八年（1767）正月條。また黎皇朝記同月條。

④Maybon, *ibid.* p. 106. 但し之は何によつたが不明である。

⑤撫邊雜錄卷一。

洪福元年壬申（1572）自是僞莫不敢復窺順廣。

⑥寔錄卷一〇、世宗乙亥十七年（1755）夏四月條註。

なほ撫邊雜錄卷四にも略々同様な税例の記載がある。

⑦寔錄同上。

⑧寔錄等に見える廣南國內活躍外商は殆んど華僑である。

⑨綱目卷三三景治元年（1663）八月條。

令區別清人來寓者。辰清人多僑寓。民間致風俗混雜。乃令各處承司察屬內有清國客人寓居者。隨宜區處。以別殊俗。

⑩黎皇朝紀。辛卯三十二年（1771）五月條。

旨下清父二處。：盜賣鐵林・桂皮。與北商者罪之。とある。大越では夙に鐵・桂皮等の外人への賣渡しを禁止してゐた。（黎朝刑律第七十六・七條）右は安南人と華商との密貿易の事實をうかがはしめる。

⑪大南寔錄正編卷一世祖壬寅三年（1782）四月條。

⑫寔錄。卷一二。叡宗乙未十年（1775）十一月條。

⑬同上卷一〇。世宗丙寅八年（1746）條。

⑭當時の興安の華僑町については、金永鍵「佛領印度支那東京興安に於ける鋪客に就いて」（金永鍵著印度支那と日本との關係所收）の研究がある。